これがわたしの旦那さま４

目次

実家の街のシュエラ　6
グラデンヴィッツ侵攻　227

登場人物紹介
ケヴィン ▲
シグルドの従兄で、第一の側近。シュエラの後見人を務める。
ヘリオット ▲
シグルドの近衛時代の仲間で第二の側近。お調子者だが実は策士。
レナード ▲
大国グラデンヴィッツ帝国を治める偉大な皇帝。優れた戦略家でもある。
▲ シュエラの弟たち
上から長男アルベルト、次男デイン、十男グレアム。計 14 人いる。
シュエラ ▲
18 歳。貧乏伯爵家の長女だったが、国王の愛妾となる。心労で体調を崩し、静養のため実家の街に帰ってきたが……
シグルド ▲
23 歳。ラウシュリッツ王国国王。シュエラを王妃に望んでいたが、貴族たちの相次ぐ妨害から彼女を守るべく、実家に帰してしまう。

実家の街のシュエラ

1　主のいない部屋

――早く元気になってくれ。

シュエラが王城を旅立つことになった夜、シグルドは彼女を見送りに出てこう言った。

元気になったら戻ってきてくれ、とまでは言えなかった。これまでだって、シュエラのためにならないとわかっていながら、手元に置き続けてしまったのだから。

シュエラが王城に来てからというもの、彼女には様々な犠牲を強いてきてしまった。

愛妾（あいしょう）という日陰の身にしたこと。侍女たちの嫌がらせ。官司（かんし）に薬を盛られたこと。舞踏会では何ら悪いことなどしていなかったのに、泥を被せたまま退場させてしまった。

にもかかわらず、シュエラは多くのものをシグルドに与えてくれた。

焦り、空回りしていたシグルドに休むことの大切さを教え、長年思いわずらっていたエミリアの心を解放し、突然帰還した異母兄（ウィルフレッド）を自らの部屋にかくまうことで国の混乱を防いで。

そして何より、人を愛する喜びを与えてくれた。

己（おのれ）が不幸にしたエミリアのために、決して誰も愛さないと誓っていても無駄だった。その献身的な優しさにいつしかシグルドの心は溶かされ、今やシュエラを手放しがたいと感じるまでになっていた。

シグルドが注ぐ愛情に戸惑い恥じらいつつも、懸命に応えようとする彼女が何よりもいとおしかった。

だがそれは、舞踏会の夜を境に失われてしまった。

おそらくあの夜、シュエラは自らの立場のもろさに気付き、自ら望んだとはいえ愛妾になったことを後悔したのだろう。だがそうとは言い出せず、かと言ってシグルドを拒むわけにもいかなくて、無理して受け入れようとしていた。

それがわかっていながら、なお求めずにはいられなかった自分が呪わしい。

そのように無理を強いなければ、シュエラは病に倒れることはなかっただろうか？

あの時、これが最後になるかもしれないと思いながら、シュエラの額に口づけた。

顔を離して見入ったシュエラの目は、涙でうるんでいた。

それを見たらたまらなくなって、シグルドは馬車の中に押し入り、シュエラの唇に自分のそれを強く押し付けていた。
うっすらと開く唇に入り込み、思うさまむさぼった。
シュエラからは、怖れも、恥じらいも、ためらいも感じられなかった。
今まではただ受け止めるだけだった唇が動いたと感じたその瞬間。
シグルドは我を忘れ、甘美な思いに陶酔し、溺れる。

現実に引き戻したのはケヴィンの一言だった。
――陛下、そろそろ。
シュエラがびくっと震え、体をこわばらせた。
そうだった。シュエラはこれから実家へ帰るのだ。
今の王城の状況は、シュエラの心を追い詰める。彼女を王妃にすまいと働きかける者や、逆に王妃になった時のためにとこびへつらう者が、次々に押しかけプレッシャーを与えていく。地位や名誉に執着しない彼女には、王妃の位は重荷にしかならない。
――よっぽど大切にしてやらなければ不幸にするぞ。
別れ際の、異母兄からの忠告。「肝に銘じます」と答えたのに、大切にするどころか結局こんな形でしか守ってやることができなかった。
離れ難い想いを断ち切り、馬車を降りた。

扉が閉められる。
その扉のガラス窓に、シュエラの顔がのぞく。
だがそれは動き出した馬車に連れ去られ、狭い門を抜けて見えなくなった。

「陛下、夜も遅いことですし、戻られませんか？」
ケヴィンにそう促(うなが)されて、シグルドはのろのろとその場から歩き出した。
西館の裏手にある通路を通って本館と北館を結ぶ連絡通路に出たところで、右に曲がらなければならないところを左に曲がる。そんなシグルドに、ケヴィンや侍従(じじゅう)、近衛隊士(このえたいし)たちは黙ってついてきた。
階段を時折挟んだ長く緩やかな坂を上り、思わぬ訪問に困惑する衛兵が開けた扉をくぐって北館に入る。
二階の東側、奥から一つ手前の部屋が、シュエラの使っていた部屋だった。
シグルドがここに入ったのは、これが三度目だ。一度目はエミリアが退位した夜。二度目はシュエラが侍従に襲われたと聞き、駆け付けた今日の昼間。
そして三度目の今夜、この部屋にシュエラはいない。
寝室の扉を大きく開き、中に入った。
主のいない夜の寝室は明かりを灯されることなく、応接室から入ってくるランプの光が、求める

人がここにいないことを思い知らせるばかり。
孤独感に耐えられず、シグルドはベッドに近付きうつ伏せに倒れ込んだ。
ベッドからほのかに香る、ハーブの――シュエラのにおい。
だが、シュエラはもうここにはいない。
何故行かせてしまったのかと、後悔が押し寄せてくる。
実家に戻したことで、シュエラを王妃にするのはますます困難になった。貴族たちはこぞって彼女とシグルドとの不和を邪推し、ありもしない不貞を疑い、愛妾として戻すことさえ反対するかもしれない。
だが、あそこまで病みやつれたシュエラを養生させるには、王城のすべてのしがらみから解放して愛する家族のもとに送り、自由に伸び伸びと暮らせるようにしてやるしかなかったのだ。

どれくらいそうしていたのか。
静かな部屋の中に、こつんと靴音が響いた。
「こちらでお休みになられますか？」
「――そうする」
あとで色々言われそうだと憂鬱になったが、今はどうでもよかった。
いくら考えても、彼女を実家に帰す以上に良い方法が思い付かない。
考えるのも、もう疲れた。

ケヴィンはランプをサイドテーブルに置き、うつ伏せになったシグルドに上掛けをかけた。
「では、おやすみなさいませ」
無駄口を叩くことなく退室して、扉を閉める。
寝室は静寂に包まれた。

2　涙上がりの朝

チチチチチ……
小鳥の鳴き声に、シュエラはぼんやり目を開けた。
硬いベッドの上で、むっくりと体を起こす。
色あせたカーテン。煤けた壁。一人用の小さなベッドが部屋の半分を占める狭い部屋。
ここは実家にあるシュエラの部屋だ。シュエラは女の子なのだからいつまでも弟たちと同じ部屋では不便だろうと、両親が与えてくれた。
狭いし古びているし、元が乳母や子守りが使う部屋だったこともあって造りも質素だが、ここが唯一、シュエラが自分の部屋だと思える場所だった。
じっくり見回しながら、シュエラは我が邸に帰ってきたことを実感する。

昨夕は、こんな風にしみじみとしていられたのはわずかな間だけだった。家族全員に温かく出迎えられ安堵したとたん、堪えていたすべてのものが溢れ出して。

家族に再会できて嬉しかった。

我を通して出ていったのに、戻ってきたことを誰にも責められずほっとした。

とうとう我が邸に帰ってきてしまった。

だが、王城にはいつ戻ることになるのか。そもそも戻れる日が来るのかすらわからない。

シグルドはシュエラに、戻ってくるようにとは一言も言わなかった——

家族との再会は、シグルドに二度と会えないかもしれないという悲しさにかき乱されて、喜びとは程遠いものになってしまった。突然泣きじゃくり始めたシュエラを見た家族は驚いて黙り込み、母エイダは優しく肩を抱いて二階へ連れていってくれた。

幼い弟たちも目の前にいたというのに、あんなふうに泣いてしまって恥ずかしい。二階にある自分の部屋でひとしきり泣いたあと、バツが悪くて部屋から出られないでいると、子守りのナンシーが部屋まで夕飯を持ってきて、「シュエラお嬢様は長旅で疲れて休んでいらっしゃるということにしてありますから」と教えてくれた。

家族と顔を合わせるのは気まずいけれど、いつまでも閉じこもっているわけにはいかない。

シュエラは体にかかっていた毛布を足元に押しやって、ベッドから足を下ろした。久しぶりによく眠れたからか、今朝は頭がすっきりしている。王都を出る少し前から感じていた起き抜けの頭の重さは、やはり寝不足からくるものだったのだろう。

実家に帰ってきたのがよかったのか、散々泣いたのがよかったのか。帰される口実として〝静養〟と言われたことは不本意だったのに、実際に効果があったというのは皮肉だ。

シュエラは軽く頭を振って考えを散らし、ベッドの下から固い蔓草で編まれた衣裳箱を引っ張り出し、着替えを一式出した。緑色のブラウスとえんじ色をした膝下までのスカート。それにスカートの前身ごろをほとんど覆う、オレンジの大きな胸当てエプロン。ブラウスとスカートは古着で、エプロンも使い込んだものだ。ところどころとれないシミがついていたり、端が少しすり切れていたりする。平民の女性は大抵このような服を着ているのだけれど、国王であるシグルドは、以前見た時相当ショックを受けていた。

あの服はシュエラが実家を出る時に着ていたもので、シュエラが持っていた中で一番きれいだった。王都から所領に引っ越した時にドレスも数着持ってきたけれど、思わぬ困窮に陥ったことと、成長期だからすぐに着られなくなるだろうということで、全て手放した。

平民の服を着るのを恥じたことは今まで一度もない。だけどその恰好をして洗濯物を取りに行ったところを見つかり、シグルドに怒られた時は本当に怖かった。

そこまで考えを巡らせたところで、シュエラははっと我に返る。

いけない。わたしったらまた……

王城を出てからというもの、身の回りで起こる出来事の一つひとつをシグルドとの思い出に結び

付けてしまう。旅の間はただ馬車に揺られていただけだからぼんやりもしていられたけれど、実家に帰ってきたからにはやるべきことがたくさんある。

下着の上にブラウスとスカートを着ると、シュエラはエプロンを身に付け、使い込んで擦り切れかけた革靴を履いた。靴の紐を結んでからベッドを整え、その上に夜着を畳んで置く。

最後に腰まであるウェーブのかかった髪をリボンで一つにくくると、シュエラは急いで部屋を出た。そのとたん、かすかに木の燃えるにおいを感じる。窓の外は明るくなっていたから、朝食の支度がもう始まっているのだろう。玄関ホールに続く階段を降りて廊下に出ると、においはさらに強くなる。廊下の途中にある扉のない部屋から、薪がぱちぱちと爆ぜる音が聞こえる。スープがぐつぐつと煮込まれる音がして、美味しそうなにおいも漂ってくる。そして静かに会話する家族の声。

シュエラはこっそり中を覗いた。

ハーネット伯爵邸の台所は、今の内情からは考えられないくらいに広い。腕を大きく広げても端から端まで手が届かないほど大きな作業台が中央に置かれ、かまどが四つもある。壁にはお玉杓子やフライ返し、フライパンといった調理器具。かまどと反対側の壁際には、腰くらいの高さの洗い場があって、ポンプで水が汲めるようになっている。

その洗い場で野菜を洗っていた女性が、入口から中を覗き込むシュエラに気付いた。

子守りのナンシーだ。彼女は髪がほとんど白くなり顔にしわが刻まれた老年の女性で、背丈はシュエラと同じくらいだけど、ふくよかなせいでシュエラよりずっと大柄に見える。

母の乳母だった彼女は、結婚した母に付き添ってハーネット伯爵家に入り、シュエラや弟たちの

子守りをしてくれた。シュエラたちにとってもう一人の母のような存在だ。

そんなナンシーと、父が幼少の頃から仕えてきてくれたヘンリの二人は、ハーネット家が貧乏になってからも我が邸に残ってくれた。父が「給金が払えないから、別の勤め先を紹介する」と言っても、二人は「家事仕事などしたことのないハーネット家の人々だけで切り盛りすることはできない、給料はいらないから残らせてくれ」と言ってくれて。二人が残ってくれたおかげで、ハーネット家は何とかやってこれた。

元々どの使用人よりも家族に近しい存在だったが、一緒に家事仕事をしたり食事をするようになったことで、家族同然となった。

「おはようございます、シュエラお嬢様」

かごの中にあるにんじん、じゃがいもの水を切りながら、ナンシーは以前と変わらぬ笑顔で挨拶してくれる。

「おはよう、ナンシー」

挨拶を返すと、煮立ったスープを昼夜用の別の鍋に取り分けていた母エイダが、手を止めて振り返った。

「おはよう、シュエラ。よく眠れた？」

昨夕のことを思い出し、少し頬を赤らめながらシュエラは答える。

「おはよう、母さま。……よく寝過ぎて寝坊しちゃった。すぐ手伝うわ」

汲み置きの水で手と顔を洗い、ポンプにかけてあった布で拭く。ナンシーは水を切った野菜を作

業台に持っていった。エイダはスープの取り分けを終えると、煮立っている朝の分のスープに水を足す。野菜の皮をむき始めたナンシーが言った。
「こちらはエイダ様とわたしがしますから、シュエラお嬢様はパンとチーズを切ってくださいませ」
「わかったわ」
シュエラは壁際に置かれた大きな戸棚に向かった。その上段には、毎食食べる固焼きパンとスモークチーズが仕舞われている。仕切りを外せばシュエラもすっぽり入れるくらいの大きさだけど、家族が多いので中をいっぱいにしても五日と持たない。
重たい引き戸を開けて中を見ると、円いチーズが四つと、三つのパンが入っていた。パンは一つひとつが一抱えもあり、これを八等分にしたものが一人の一食分の量になる。そのためこの大きなパンが三つあっても、生まれたばかりの弟を除く家族十八人の一食分にしかならない。
パンを全部作業台に置いてから、シュエラはチーズを取り出した。それはシュエラの手のひらを二つ並べたくらいの大きさだけれど、厚さが指の長さくらいあり、ずっしりと重い。それを作業台に置き、刃がぎざぎざになっている細長いナイフを取り出した。シュエラは熟成され固くなったチーズを、十八等分に薄く切り分けていく。
チーズをほとんど切り終えたところで、シュエラはふと思い出した。
「あ。そういえば食堂の掃除は？」
食堂の掃除は、以前はシュエラの役目だった。シュエラが邸を出たあとは一体どうしていたのだろうか。

「食堂の掃除なら」
果物の皮をむき始めたエイダが答えようとした時、騒がしい足音が聞こえてきた。
こういううるさいのは次男のデインに決まっている。叱りに行こうとナイフを置き、入り口のほうへ一歩足を踏み出したところでデインが勢いよく顔を出した。
「食堂の掃除済んだ！　今からガキども起こしてくるぜ！　あ、姉ちゃんおはよっ」
言いたいことだけ言ってすぐに顔をひっこめ、来た時と同じようにばたばたと駆けていく。
その慌しさ以上に彼の言葉に驚いて、シュエラは叱るのも忘れぽかんとした。
今、食堂の掃除が済んだとか言った……？
信じられない。他の弟たち同様叩き起こさなければ起きられなかったデインが、自ら早起きして、しかも家事を手伝っているなんて。
呆然としてデインが消えた入り口を見つめていると、長男アルベルトがひょっこり顔を出した。
「あ……おはよう、姉上」
「お、おはよう。アルベルト」
寝ぼけた声で挨拶され、シュエラは拍子抜けしてついどもってしまう。
アルベルトはふらふらと洗い場に向かった。彼は朝が弱く、朝食が終わるまではだいたいこんな感じだ。しかし久しぶりにそのテンションの低さを目にすると調子が狂ってしまう。王城の侍女たちは朝から元気だったし、この一カ月余りほぼ毎日寝起きをともにしたシグルドも寝ぼけていたのは一回だけ。

その時のことを不意に思い出して、シュエラはほんのり頬を赤らめた。

朝には珍しい……というか、初めてだったのではないだろうか。シグルドはぼんやりしながら唇を重ねてきて、深く口づけようとした。

ヘリオットたちが見ていなければよかったのに、と今でも残念に思う。寝ぼけていたからこそ、本当にそうしたいと思ってくれているように感じて、シュエラの胸は高鳴った。

シグルドの口づけには、常にどこか一歩引いた冷静さがあった。起き抜けの頬をついばむ口づけにも、夜の務めを教えてくれる時の口づけにも、いつもシュエラの反応を確かめるかのような余裕があって。

わたしはどきどきしてどうにかなってしまいそうなのに、どうして陛下は平気なの……？

そう思うたびにシュエラの心にはさざ波が立ち、決まってエミリアの存在が思い出された。

シグルドの初恋の人であり、そして今も彼が想いを寄せている人。

冷静でいられるのは、きっとシグルドの心がシュエラではなくエミリアにあるからだ。そのことがいつも頭の中にあって、口づけの時も触れられる時も、嬉しいのに悲しくて、身が引き裂かれるようだった。

シグルドとエミリアがもはや心を通わせることはないとわかっていても、やはりシュエラの心は苛まれる。

シグルドはエミリアを想うがゆえに、彼女を王妃の位から退かせ、国外に出ることを許した。

エミリアは今、その旅の最中だ。愛するウィルフレッドと暮らすためとはいえ、王族の一員として諸国を訪問した時とは比べ物にならないくらい苦労していることだろう。貴族の身分を捨てたからには、たどりついた地でも平民として暮らさなければならない。彼女は、シュエラやカチュアたちから聞いて、平民の暮らしがどれほど大変なものか知っている。けれど彼女はあえて苦難の道を選んだ。

それにエミリアは、自分たちのしあわせのためだけに王妃の位を退いたわけじゃない。事あるごとにシグルドを追い落とし、国を意のままに動かそうとしていた自分の伯父の野心をくじくため、自ら退位の意を表して伯父を激昂させ、罪に誘い込んだ。

愛妾の存在を容認したばかりか、世継ぎを産む役目をシュエラに託してくれたエミリア。国のため、シグルドのためを思うその高潔な人柄に、シュエラは憧れ、尊敬もしていた。なのに一方では、シグルドに愛される彼女がうらやましくてしかたなくて、二人は二度と会えないとわかっているのに、未だにそのことを胸にくすぶらせ続けている。

陛下はまだエミリア様を愛してらっしゃるの？　別の男性を選んだエミリア様を……？

知りたいけど、聞くに聞けない。そんなことを質問できるような身分でも立場でもない。王都から遠く離れ、実家に戻ってきてしまったからにはなおさら――

「姉上……代わろうか？」

不意に間近で声をかけられ、シュエラは飛び跳ねそうなほど驚いた。手を洗い終えたアルベルト

が、いつの間にかすぐ脇に立っている。シュエラは考え事を頭の中から追い出して、取り繕うように笑みを浮かべた。
「こっちは大丈夫よ。それより、食器をワゴンに積んでくれる？」
「わかった……」
アルベルトはぼんやりした様子で返事をすると、作業台の隅にある大きなかごから木の食器を取り出し始めた。昔は陶器の食器もあったが、高価なので売り払ったのだ。それに子どもの多いハーネット邸では、割れにくい木の食器のほうが都合がいい。
アルベルトは二段式のワゴンに食器を積んでいく。スプーンはまとめて深皿の一つに入れ、積み上げた食器の上に置いた。
その手慣れた様子から、アルベルトが普段から手伝いをしていることがわかる。デインと同様、朝は叩き起こさなければ全然起きなかったのに。月に一回やり取りしていた手紙に「アルベルトたちもよく家事を手伝うようになった」と書かれていたので少しばかり安心していたのだけれど、こうして実際目にしてみると、彼らがどれだけ頼もしくなったのかがよくわかる。
シュエラは弟たちの成長を嬉しく思いながらチーズを切り終え、パンのほうに取りかかる。中はやわらかいが、表面は木のように固い。刃先を内側に食い込ませようと小刻みにナイフを動かしていると、アルベルトがまた隣に立った。
「やっぱり代わるよ」
見かねたようにシュエラからナイフを取り上げ、自分の前にパンを引き寄せる。そしてパンのてっ

ぺんに刃を当てると、ゆっくり大きくナイフを動かした。するとさほど力を入れていない様子なのに、すぐに切れ込みが入った。刃が食い込むと、さらにパンを回転させて二つに切る。同じ要領で、さらにそれを二つ、もう二つと切り分けていった。
シュエラはその作業に見入って、感心したように言う。
「腕力ないのに、よくそんなに速く切れるわね」
「……男だからね。それなりに腕力はあるさ」
アルベルトは手を止めて隣に立つシュエラをちらっとにらみ、むっとした様子で言う。どうやらプライドを傷つけてしまったらしい。
「ごめんなさい。言い方が悪かったわ。男の子だもの、力はあるわよね」
アルベルトだっていつまでも子どもでいるわけじゃない。シュエラを呼ぶ時も、今までは〝姉さま〟だったのに、知らないうちに〝姉上〟に変わっていた。そろそろ大人になることを自覚してきたのかもしれない。今でも朝は苦手なようなのに、早起きして家事を手伝っているのも、その表れなのだろう。そういう努力の一つひとつを認めてあげなければ。
そう思いながらも、シュエラは小さくため息をついた。
「こっちはアルベルトだけで大丈夫そうだから、デインを手伝ってくるわね」
弟たちを起こすのは大変だ。眠いとぐずるのを叱ったりなだめすかしたりして、服を着替えさせ外の井戸で顔を洗わせなくてはならない。
廊下に出ようとすると、アルベルトに呼び止められた。

「あいつらのことはデインに任せておけばいいよ」
振り返ったシュエラは、困惑してアルベルトを見る。
「え……？　でも、一人じゃ大変じゃない？　着替えとか」
下の子たちは一人ひとり服のボタンをはめてやったり、靴の紐を結んでやらなくてはならないのに、デイン一人で何とかなるとは思えない。
アルベルトはナイフを持つ手元から目を離さずに言った。
「みんな自分で着替えるよ。三つ子以外は紐も結べるようになったし」
「グレアムも？」
十男七歳のグレアムは、自分で夜着を脱ぎズボンとシャツを着られるようにはなっていたが、紐だけは結べず、靴紐を踏み、ずり下がりそうになるズボンを握りしめて、シュエラが気付くのをずっと待っていた。やれば何でもできる子だとは思っていたけど、そうやって甘えたがっているのがわかっていたから、結べるようになろうねと言いつつ、いつもシュエラが結んでやっていた。
いつ結べるようになったんだろう。弟の成長を嬉しく思うのと同時に、その瞬間に立ち会えなかったことや、そばにいてほめてやれなかったことを残念に思う。
内心がっかりしていると、それを見透かしたかのようにアルベルトが言った。
「姉上がいなくなったからこそだよ」
どういう意味なのだろう？　シュエラが考えているうちに、アルベルトは人数分のパンを切り終え、残りをナイフと一緒に戸棚にしまった。

「運ぶよ。手伝って」
「う、うん……」
アルベルトが何事もなかったかのように言うので、シュエラは彼に促されるまま手伝うしかなかった。

食器やパンやチーズを載せたワゴンを押すアルベルトに続いて、シュエラも台所を出る。
玄関ホールを通りかかった時、アルベルトがぽつぽつと話し出した。
「姉上が行ってしまったあと、しばらくの間は大変だったんだ。食事がいつもの時間にできなかったり、寝支度に手間取っていつまでもベッドに入れなかったりさ。夕飯とかは見かねた父上とヘンリが手伝って何とかしてたけど、朝はあいつらがぐずってなかなか起きないから、父さんとヘンリが先に朝食を食べて、領地の見回りに出かけるなんてのもしょっちゅうだった。……そうなって初めて僕たちはようやく、姉上の口うるささがどれだけ家族のためになっていたかを理解したんだ」
「口うるさいってあなたたち、わたしのことをそう思ってたの？」
確かに、言うことを聞かない弟たちをよく叱り飛ばしていたけれど、そんな風に思われてたなんてちょっとショックだ。
玄関ホールの端を通って一階西翼の廊下に入り、南側の一番手前の扉に入る。
そこがハーネット家の食堂だった。二つ部屋をつなげたような縦長の部屋の中央には、長方形のテーブルが三つ並んでいた。本来ここは客をもてなす時に使う部屋なのだが、家族の多いハーネッ

ト家では食堂として利用されている。以前はこの部屋にも、客人を迎え入れるにふさわしい装飾がほどこされていたのだけれど、所領の手入れの資金を得るために、そういったものはすべてひっぺがしてしまった。ハーネット家は邸全体がそんな感じで、壁紙は汚れ、床板は傷んで軋み、天井にはそこかしこに雨漏りの跡が残ったままだ。

ケヴィンの援助でお金に困らなくなったはずだけど、父ラドクリフはいずれ返済したいと言っていたので、それが済むまで出費はできるだけ抑えるつもりなのだろう。

食堂に入ったシュエラとアルベルトは、手分けして平皿とスプーン、パンを各席に置き始めた。それを終えると、小さな弟たちのパンの皮をはぎ、その皮を細かくちぎる。子どもの手では固く焼きしめられたパンの皮をちぎるのは大変なので、あらかじめ小さくしてやるのだ。ちなみにパンの皮は大人の歯にも固いので、スープに浸してやわらかくしながら食べるのが普通だった。

手を動かしながら、アルベルトは先ほどの話を続けた。

「そのうちこのままじゃいけないって思うようになって、少しずつ姉上がしていたような手伝いをするようになったんだけど、その時も姉上がどれだけ母上やナンシーの助けになっていたのか知って驚いたよ。内職もやってたのに、食事の下ごしらえや掃除洗濯も手伝ってたんだろ？　〝早く起きて着替えなさい〟とか〝早くご飯を食べなさい〟とか、怒ってばかりじゃなかったんだなって」

思っていたより口やかましくしてしまったかもしれない。シュエラは恥ずかしくなって口ごもった。

「それは、あなたたちが早くしてくれないと、いろんなことが片付かなかったから……」

「うん。自分たちが手伝うようになって、ようやくそれがわかるようになったんだ」

先ほどから、階段を駆け下りる音がいくつも聞こえている。それが静まったかと思うと、今度は外から弟たちのはしゃぐ声が聞こえてきた。

「今日もグレアムが一番だったな！　兄貴ども、弟に負けてくやしくないか？」

「グレアムはここに来てからシャツのボタンはめてるじゃん。ずりーよ！」

「はははっ！　作戦勝ちだな！　おまえらも頭を使えよ、頭！」

叩いても起きなかったデインが、エラそうなこと言ってる……

耳をすませていたシュエラは、呆れてしまう。

それと同時に感心もしていた。以前はぐずってなかなか起き出さなかった弟たちが、先を争うようにして井戸まで走っている。

デインは、一体何をやったの……？

不思議に思ってシュエラがついつい手を止めていると、手際良くパンの皮をちぎりながらアルベルトが説明してくれた。

「みんな気付いたんだよ。母上たちの手をわずらわせなければ、それだけでも手伝いになるってことに。……最初に気付いて、他のみんなもそれに気付くように仕向けたのはデインだけどさ。朝、僕たちを起こすのに母上たちがすごく時間をかけていたから、デインが〝自分たちで起きるから起こしにこなくていい〟って母上たちに言ったんだ」

「そんなことしたら、余計に朝食の時間が遅くなっちゃったんじゃない？」

シュエラが口酸っぱく言わなければどうにもならなかったのに、デインが一言二言言っただけで聞き分けがよくなるとはとても思えない。信じられない気持ちでアルベルトを見ると、彼は手を止めて肩をすくめた。

「最初の一日はね。ぐずぐず着替えて顔を洗って食堂に行ったら、それまでと違って食事がすっかり出来上がっていたもんだから、みんなびっくりしたんだ。デインだけが満足そうにして、〝自分たちが面倒をかけなければ、こんなに早く朝食の支度が済むんだぞ〟って」

シュエラはすっかり呆れてしまった。そんな結果を見せつけられたら、確かに納得するしかない。勉強嫌いでねぼすけの筆頭だったのに、よくもまあそんな知恵が回るものだ。策を立てて人の心を操ってしまうデインに、人好きのする顔をしながら腹黒いことを考えていたヘリオットが重なる。

そこからシグルドのことを考えそうになった時、アルベルトは不意に話を変えた。

「グレアムはさ、姉上が行ってしまってからずっとふさいでたんだけど、デインが手伝いをしようって言い出してから元気になって、今じゃ誰よりも積極的に手伝いしてる。相変わらず無口だから何考えてるのかわからないけど、甘えたそうにすることが少なくなったよ。――王城に、姉上に会いに行った時はすごく甘えたがってたけどさ」

以前は嫌々ながら手伝いをしていた弟たちが、そこまで考えるようになったなんて。母とナンシーが楽になっただろうとほっとする半面、今まで口酸っぱくしてきた自分は何だったのかとがっくりしてしまう。

シュエラが肩を落とす様子を見てその心中を察したのか、アルベルトは少し慌てたように言った。

「さっきも言ったように、僕たちが手伝いを頑張ろうと思ったのは、元々姉上が手伝いをしていて、そのあとでいなくなったからだよ。姉上がいる時は、どれだけ僕らのために頑張ってくれていたか気付けなかった。でも姉上が行ってしまって邸の中が回らなくなったことで、ようやく姉上のありがたみがわかるようになったんだ。……ずっと苦労かけっぱなしでごめん。僕らはもう大丈夫だから、だから」

不意にアルベルトは口ごもる。何か言おうとしてためらっているようだけど、シュエラはとりあえず礼を言った。

「ありがとう、アルベルト。アルベルトやみんなが邸のことを手伝ってくれるようになって、わたしも安心したわ」

本当はちょっと寂しい。自分がいなくても、みんなちゃんとやっていけるのだとわかって。でも、これは喜ぶべきことでしょう？　そう思って無理に笑顔をつくる。

そんなシュエラの様子に気付いたのか、アルベルトはちょっとだけ眉をひそめた。

「姉上……」

そうして少しの間見つめ合っていると、廊下から足音が聞こえてきて、がちゃっと音を立てて扉が開く。

入ってきたのは、末の弟ルーミスを抱いた父ラドクリフと、父より七つ年上で、細長い顔に最近しわが増えてきた執事のヘンリだった。

「おはよう、シュエラ、アルベルト」

「おはようございます、シュエラ様、アルベルト様」
「おはようございます、父さま、ヘンリ」
「おはようございます、父上、ヘンリ」
父、ヘンリ、シュエラ、アルベルトの順に、挨拶をかわしていく。
ヘンリが食堂の片隅にある小さなテーブルの上に大きなかごを置くと、ラドクリフはその中にルーミスを寝かせた。パンの皮をちぎり終えたシュエラは、ルーミスをあやしている父のそばに行く。父の隣でかごを覗き込むと、ルーミスはうとうとしているところだった。髪は栗色で少しくせがあり、体は赤ん坊らしくふくふくとしている。目を閉じかけているので瞳の色はよくわからないけれど、耳の形は母に、口元は父に似ているような気がする。
昨日会えなかった小さな弟に、シュエラはささやくように声をかけた。
「はじめまして、ルーミス。……姉さまよ」
今まで弟が誕生した時はみんなと一緒に初対面していたけれど、一人でこういう挨拶をするのは何だか気恥ずかしい。
そんなシュエラをよそに、ルーミスは眠気に耐えきれないといった様子で完全に目を閉じた。
「生まれてまだ一カ月だからね。よく眠るんだよ」
穏やかな寝顔をラドクリフと二人でほのぼのと眺めていると、廊下をばたばたと走ってくる音がする。注意しようとそちらに足を向けた時、扉が勢いよく開いて弟たちがなだれ込んできた。
「おはよー！　あ、姉ちゃんだ」

「改めておかえりー」
「あなたたち、ちょっと静かにしなさい！　ルーミスが――」
そこまで言って自分の声も大きかったことに気付いたシュエラは、声を落としてそろりとルーミスに視線をやった。ルーミスが目を覚まして大声で泣き出すかも――と思っていたのに、ルーミスは先ほどと変わらずすやすやと眠っている。
ラドクリフが呆れ混じりに説明した。
「うるさくても平気みたいなんだ。きっと生まれる前から我が邸の賑やかさに慣れていたのだろうな。この賑やかさを子守唄代わりにしているのかもしれないとよく思うよ」
この賑やかさに慣れなくては家族の一員としてやっていけないと、生後一カ月ですでに悟っているらしい末の弟に、シュエラは感心すべきか哀れむべきかわからなくなる。
何とも言えない気分になって、まとわりついてきたグレアムの肩に手を置いてルーミスを見下ろしていると、つい先ほど出ていったヘンリが、ワゴンに三つの寸胴鍋を載せて戻ってきた。かまどにかかっている大鍋は重たすぎて動かせないので、配膳用の鍋に移し替えてきたのだ。そのあとに果物の器を持ったエイダとナンシーが続く。
「さあさ、朝食にしますよ！」
ナンシーが食堂全体に聞こえるように声をかけると、弟たちはふざけっこするのをやめて、それぞれ動き出した。五男十二歳のハリスを含めた上の弟たちはワゴンのところへ集まり、それより下の弟たちは席に着いて行儀よく待つ。シュエラに甘えていたグレアムも、シュエラからぱっと離れ

て他の弟たちに倣った。
前は食事だって言っても、なかなか席に着かなかったのに……
シュエラはその変わりようにまたまた呆れつつ、スープを配る側の弟たちに加わる。危なっかしくスープを運ぶ弟たちだけでなく、母もそれぞれの平皿に果物を配って歩いているので、小さな弟たちがじっとしているのはとても助かった。
ハーネット家では、小さな弟たちの面倒を見るために、その間に大人や年長者が座ることになっている。シュエラは九男八歳のコリンと、十男グレアムの間の席に着いた。
ヘンリとナンシーを含む家族がみんな席に着くと、ラドクリフは全員を見回して言う。
「みんな、おはよう。それでは食べよう」
これを合図に、ハーネット伯爵家の賑やかな食事が始まった。育ち盛りの弟たちは一心不乱にがっつき、小さな弟たちは食べるのに夢中になるあまりパンやスープをこぼしたりする。以前はそんな弟たちの世話をしながらでも食事ができていたのに、王城でのゆっくりとした食事に慣れたシュエラはなかなか食べ進められない。
そうしているうちにまず上の弟たちが食事を終えて立ち上がり、それからラドクリフとヘンリが立ち上がる。コリンとグレアムもシュエラよりずっと早く食べ終わってしまい、二人が自分の食器をワゴンに運ぶ姿を横目で見ながら、シュエラはスープに浸したパンをせっせと口に運んだが、六歳の三つ子たちにも遅れを取ってしまいそうだった。
何とか一番最後にならずに済んだシュエラは、みんなと同じように食器をワゴンに運んだ。

ワゴンにたどり着く直前、四男ファルティオが喜々とした様子で近寄ってきて両手をずいっと差し出してくる。
「姉ちゃん、もらうよ」
「あ、ありがとう……」
お礼を言いながらおずおずと食器を手渡すと、ファルティオは嬉しそうに笑って受け取り、すぐさまワゴンに積み始める。その様子を言葉もなく見つめていると、デインが食卓を拭く手を止めてからかうように言った。
「何だよ、姉ちゃん。オレたちが手伝いしてるのが、そんなに変かよ？」
「へ、変だなんて思ってないわよ……」
ただ、初めて見る光景に戸惑っているだけだ。デインとファルティオと、もう一つのワゴンを押して先に出て行った三男ロディの三人は、弟たちの中でも特に言うことを聞かなくて、以前はいかにしてお手伝いから逃れるかばかり考えていたくらいだ。それが、シュエラがいなくなったというだけでこれほど変わるのだから、驚かずにはいられない。アルベルトはシュエラのありがたみがわかるようになったと言ってくれたが、ここまで変わられてしまうともっと早く家を出ればよかったのでは、とすら思ってしまう。
三つ子と彼らの世話をしていたエイダとナンシーが出ていくと、デインは一番汚れている食卓を手早く拭き、ファルティオは最後の食器をワゴンに積み上げる。ワゴンを押す二人について、シュエラも食堂をあとにした。

台所に行くと、ルーミスがかごの中ですやすやと眠り、その傍らではアルベルトとロディが野菜の皮むきをしていた。エイダとナンシーの姿はない。洗濯をしているのだろう。隣の洗濯室から水音が聞こえてくる。

デインとファルティオは、食器をワゴンから洗い場に移して洗い出した。少々乱暴だけれど手際がいい。手伝おうと思って食器を拭く布に手を伸ばしかけた時、石鹸を泡立てた桶の中で食器をがちゃがちゃ言わせているデインから声が飛んだ。

「いいっていいって。姉ちゃん、病気になったから帰ってきたんだろ？　手伝いはオレらに任せて休んでなって」

「そうだよ、姉ちゃん。休んでなって」

ファルティオも、デインの口調を真似て同じことを言う。

「でも……」

「お城でも〝何か手伝わなきゃ〟ってキバりすぎて、疲れちゃったんじゃねーの？」

デインはからかっているつもりだったのだろう。けれどシュエラは、自分の愚かさを悟られた気がしていたたまれなくなった。

王城では、空回りしていたんだと思う。役に立ちたい、何かせずにはいられないと思うあまりに。少しは役に立てたと思う。隣国の民の働き口を増やす提案をしたり、シグルドを追い落とそうとするラダム公爵を罠にかけるための囮になったり。けれど、一番大切な役目――世継ぎを産むこと――は果たせなかった。

その必要もなくなって、シュエラはこうして実家に帰された。

「姉上……やっぱり体の調子がよくないんじゃないの？」

アルベルトに声をかけられて、シュエラははっと我に返る。そして心配そうに見つめてくるアルベルトに、取り繕うような笑みを作った。

「そうかも……部屋に戻って休ませてもらうわね。何か手伝うことがあったら呼んでちょうだい」

そう言ってシュエラは台所を出て、とぼとぼと自分の部屋に戻った。

部屋に戻ったところで、本当に体調を崩しているわけでもないし、昨夜はたっぷり睡眠を取ったので眠れるわけがなかった。

王城から持ち帰った鞄からレース編みの道具を引っ張り出し、ベッドに座って編もうとするけれど、どうしても集中することができない。

王城で暮らし始める前はこんなことはなかった。腹が立つ時も、悲しい時も、編み針を手にして編み始めればすぐに集中できたし、気分も落ち着いたものだった。

でも今は、一人静かに編み針を動かしていると、頭の中にさまざまな考えが押し寄せてくる。

弟たちが積極的に手伝いをしている姿を見て、嬉しかったのと同時に寂しかった。自分はもう必要ないように感じられて。

自業自得だ。反対を押し切って家を出たにもかかわらず結局帰されてしまい、実家での居場所も失った。

わたし、一体何のために王城へ行ったの……？
自分の人生を捧げるつもりで臨んだ大きな役目を失ってしまい、これからどうしたらいいのかわからない。
考え事に邪魔されて、なかなか針が進まない。シュエラは編み物をするのをあきらめて、ベッドの上にごろんと横になった。
古ぼけた天井。ほんの数歩で端から端まで歩けるほど狭い、我が邸の私室。
王城の贅沢な部屋が恋しいわけじゃない。あの部屋にいなければ会うことすら叶わない、シグルドが恋しくて仕方ないのだ。
涙が込み上げてきて、シュエラは片方の腕で目元を覆った。
自分が愛妾の役目から降ろされた以上、ケヴィンから援助という形でお金を借りることはできなくなる。そうなったら、このハーネット伯爵領はやっていけるのだろうか。これから、新しい領民をたくさん受け入れなくてはならないのに……
そうやって涙をこらえ、どれくらいの時間が経ったのか。気付くと、控えめなノックの音が響いていた。
「シュエラ？　ちょっといいかしら？」
母の声だ。シュエラは起き上がって答えた。
「どうぞ」

遠慮がちに戸口から顔を覗かせるエイダに、シュエラは心配をかけまいと笑顔を見せる。しかし、そんな娘を見てエイダは表情を曇らせた。
「体調が悪そうだってアルベルトから聞いたけれど……本当に具合が悪そうね」
そんなに無理しているように見えるのだろうか。頬に手を当てて考えていると、エイダは中に入って扉を閉め、シュエラの隣に腰を下ろした。
「あなたがどんなに平気なふりをしていたってわかるわよ。だって、母親だし家族ですもの。アルベルトも心配していたわ。無理させたくないから手伝わなくていいって言ったのに、あなたがあんまり嬉しそうじゃないからかえって悪いことをしてしまったんじゃないかって」
「悪いことだなんて、そんな……」
弟たちが手伝いをするのはいいことだ。使用人を雇う余裕はまだないから、弟たちがたくさん手伝いをすれば、それだけエイダとナンシーの負担は軽くなる。
弟たちが悪いんじゃない。悪いと言うなら、勝手に出ていったのに居場所がなくなったと寂しがるシュエラのほう。
唇を噛みしめて黙りこむシュエラに、エイダは優しく語りかけた。
「手紙には元気でいるとしか書いてなかったけれど、王城で何か辛いことでもあったの？」
母さまには、どうしてわかってしまうんだろう……
少しも責めようとしない、温かく包み込むような声を聞いて、とうとう耐えきれなくなる。
シュエラは肩を震わせ、涙の滲んだ目を閉じた。

「母さま。わたし、もう王城に戻らなくていいのかもしれない……」

3　新しい道しるべ

――どうだろう？　この機会に里帰りがてら実家で養生してみては。
シュエラが王城で過ごした最後の日、シグルドは彼女にこう言っただけで、愛妾（あいしょう）の座から降ろすとは言っていなかった。
けれどシグルドの立場や置かれた状況を思えば、そうするより他はなかった。
エミリアの退位により空席となった王妃の座に、近いうちに誰か別の女性が座ることになる。
そして、その〝誰か〟にシュエラが選ばれることはない。
シュエラは王妃としてふさわしい後見を持っているわけでも、王妃になるための教育を受けているわけでもない。自らの地位を危（あや）ぶんでいるラダム公爵派の貴族たちに、シュエラの存在は大きな動揺をもたらす。
ラダム公爵の失脚に、大勢の民の受け入れ。大きな変化に揺れ動くラウシュリッツ王国は、早期に貴族たちが認める王妃を迎え、安定を図らなければならないのだ。
シグルドが自分を気遣ってくれたことを疑っているわけではない。

だが貴族たちは違う。ある者はシュエラに王妃の座を辞退するよう求め、ある者は逆に王妃となることを見込んで面識を得ようと騒ぎを起こし、ある者はまだ決まってもいない新しい王妃とシュエラの対立を恐れ、隣国の二の舞を演じぬようシュエラを亡き者にしようとした。

そんな状況で養生できるはずがないと、シグルドや医者が判断するのは当然のことだった。

寝不足のため倒れてしまったシュエラに、医者は養生が必要だと言った。それを聞いたシグルドは、実家ならゆっくり休めるだろうと帰ることを勧めてくれた。

――早く元気になってくれ。

そう言って見送ってくれたけど、戻ってこいとは言われなかった。

あれが別れの言葉だったの？　それともそのあとの口づけが？

シュエラの額に軽く口づけしたあと、シグルドはゆっくりと顔を離した。その時、遠くに燃える松明（たいまつ）のかすかな光を映し、二人の視線は絡まった。

シグルドは何を思ったのか、突然馬車に乗り込んできて、シュエラを抱きしめ深く唇を重ねてきた。最後の時を惜しむかのように激しくなっていくキスに、馬車の外にマントノンたちがいることすら忘れて、シュエラも溺れた。

どうしてあんなキスを？　陛下も本当はわたしを帰したくないと思ってくださっていたの？

考えたところで、シグルドの気持ちがわかるはずがない。

身分や立場がどうのと考えず、尋ねてみればよかった。

会えなくなってしまった今になって、後悔の念が湧き起こってくる。

隣に座り黙ってシュエラの話を聞いていた母エイダは、膝の上で両手を固く握り合わせてうつむく娘に、優しく声をかけた。

「国王陛下のことが好きなのね、シュエラは」

シュエラはこくんと小さくうなずく。その拍子に、目尻にたまっていた涙が膝や手の上にぽたぽたと落ちた。

「さ……最初は、好きになっちゃいけないって、思ってたの。陛下には、王妃陛下がいらっしゃって、わたしだけの方（かた）にはならないってわかってたから。でも、陛下はとても優しくて、思いやりがあって、これ以上好きになってはダメって自分に言い聞かせてたのに……」

何て馬鹿だったんだろう。別の人を愛している人を好きになるなんて辛いだけだとわかっていたくせに。

わたしだけを見て。わたしだけを好きでいて。

心の中で願わずにはいられなかったけれど、その願いをシグルドに告げるわけにはいかなかった。何故なら、シグルドの想いは王妃に向けられなければならず、それを承知の上でシュエラは愛妾（あいしょう）になることを決心したのだから。

こみ上げてくる嗚咽（おえつ）をこらえていると、エイダは不意に明るい声を上げた。

「ケーキを焼きましょう！」

今まで話していた内容とあまりにかけ離れた提案をされて、シュエラは思わず顔を上げる。目が

合うと、エイダはにっこり笑って言った。
「せっかくシュエラが帰ってきたんだもの。今日のおやつは奮発して、卵とバターをたっぷり使ったケーキにしましょう。手伝ってちょうだい。あなたがケーキを焼くと聞いたら、みんな大喜びするわ」
突拍子のない提案に、シュエラは目をしばたたかせる。いつになく強引なエイダに引っ張られるまま、シュエラはベッドから立ち上がり部屋を出た。

洗濯室にいたナンシーに、エイダは先ほどの提案を話す。洗濯物をしぼる手を止めて聞いていたナンシーは、目を丸くして嬉しそうな声を上げた。
「まあまあ、シュエラ様がケーキを？」
「だから、シュエラと一緒に街に行って材料を買ってきてほしいの。卵とバターが売り切れてしまうといけないから、急いでね。洗濯の続きはわたしがするわ」
「わかりました。それでは行ってまいります。シュエラ様、急ぎましょう」
エプロンで手を拭くナンシーに追い立てられるようにして、シュエラは洗濯室から出る。
台所で買い物かごを二つ用意して玄関に向かうと、ちょうど勉強道具を持って階段を駆け下りてくる小さな弟たちと鉢合わせた。ナンシーが買い物かごを腕に提げているのを見ると、目を輝かせて尋ねてくる。
「買い物？」

「何作るの？」
ナンシーが買い物に出る時は、必ず何か美味しいものを作ると思い込んでいるところは、以前と変わっていない。
ナンシーは胸をそらしてもったいぶるように弟たちに言った。
「シュエラお嬢様がね、ケーキを焼かれるんですよ」
「えー？　姉ちゃんがケーキ？　ちゃんと焼けるの？」
生意気を言いたがる年頃の七男十歳のキーツは、唇を尖らせて言う。
口では不平を言うけど、その声音にも表情にも冗談めかした色がある。八男九歳のマーティンと九男八歳のコリンが同じようにぶーぶー不平を漏らす。
勉強道具を小脇に抱え、階段を降りてきた五男ハリスが、小さな弟たちの後ろを通り抜けながら言った。
「そんなこと言う奴のケーキは、他のみんなと分けて食っちゃうからな」
「そうですよ。バターと卵たっぷりの甘〜いスポンジケーキを焼きますからね。いい子にしてらっしゃらない方には差し上げませんよ」
途端に弟たちは色めきだつ。
「スポンジケーキを焼くの⁉」
「飾りつけは？　クリームたっぷりだといいなぁ」
「おまえたち、宿題はちゃんとやったか？　時間までに宿題ができてない奴はおやつ抜きだぞ」

ハリスに続いて下りてきた六男レオルグが、そう言いながら食堂に向かう。
普通貴族は家庭教師を邸に呼んで子どもを教育するが、家庭教師を雇えないハーネット家では、十二歳までの弟たちにはアルベルトが午前中に勉強を教え、それより上の弟たちには父やヘンリが夜に教える。人数が多いので、みんな食堂に集まって一緒に勉強していた。
レオルグの背中に向かって、キーツが不服そうな声を上げる。
「そう言うレオルグは、宿題やったのかよー？」
返事をしようとしたレオルグのうしろを、ちょうど先生役のアルベルトが通りかかる。彼が食堂に向かったので、弟たちは話をやめて追いかけた。
やれやれと思いながら見送っていると、グレアムが一人残っていることに気付いた。シュエラはしゃがんで、泣きそうな顔をしている彼と視線を合わせる。
「どうしたの？」
「……帰ってくるよね？」
「当たり前よ。ちょっと街まで買い物に出るだけだから」
苦笑して答えたシュエラに、グレアムはくしゃっと顔を歪めた。
「だって、姉さまいきなりいなくなっちゃったもん」
別れの挨拶もそこそこに王都に旅立ってしまったことが、七歳の小さな弟の心に暗い影を落としてしまったことに改めて気付く。
唇を噛んで涙をこらえるグレアムを、シュエラはそっと抱きしめた。

「大丈夫よ。ちゃんと帰ってくるから。――あとで一緒にいてあげるからね」
納得したのか、グレアムはこくんとうなずき、シュエラの腕から離れて食堂へ駆けていく。
「それでは行きましょうか、お嬢様」
「ええ」
軋む両開きの扉を開けて、シュエラはナンシーと一緒に家を出た。

ハーネット伯爵領唯一の街イーウェンは、宿屋、パン屋、雑貨屋などが軒を連ね、金物屋、靴屋などの職人が工房を構えている。
人口は約四百人。ラウシュリッツ王国の伯爵領としては平均的な大きさの街だ。
邸と街をつなぐ緩やかに曲がった雑木林の道を抜けると、シュエラはナンシーに言った。
「あとでマリアンさんの古着屋に寄ってもいい？　挨拶もしないまま王都に行っちゃったから、声をかけずに邸には戻れないわ」
「そうですね。シュエラお嬢様が王都に行ったと聞いて、たいそう心配してましたよ」
そんな話をしながら件の古着屋の前を通り過ぎようとして、シュエラは思わず立ち止まった。以前は軒先にたくさんぶら下がっていた古着が、今は一着も見当たらない。商品台の上に置かれている古着も、前と比べて明らかに減っていた。
「ねえナンシー――」
一体何があったのか尋ねようとした時、店の奥からこげ茶色の巻き毛を頭の後ろでひとくくりに

した、エイダと同じくらいの年齢の女性が飛び出してきた。
「シュエラ！」
「マリアンさん！」
お互い大きく手を広げてひしと抱き合う。
「昨日帰ってきたんだって？　どうして早く顔を見せに来なかったの！」
「ご、ごめんなさい。あの」
「ああ、わかってる。王都からの長旅で疲れちゃったんだよね。あんたときたら何も言わずに王都に行っちゃうから、どれだけ心配したことか」
古着屋のマリアンは、この街で最初に仲良くなってくれた人だ。ハーネット伯爵家が自分たちで家事をこなさなければならなくなった時、母エイダは自分が着ていたドレスをマリアンの店にあった古着一着と交換し、その差額を授業料として家事を一通り教えてもらえるよう交渉した。そんなエイダの思い切った行動が、ハーネット家の人々がマリアンというかけがえのない友を得るきっかけとなった。
「マリアンさん、あの、お店の商品がすごく少ないみたいだけど……」
遠慮がちに尋ねてみると、マリアンはちょっと驚いたように目を見開き、それから楽しそうに話し出した。
「ああ、聞いてないのかい？　隣の国から来た人たちにあげるために、伯爵さまがたくさん買い取ってくださったのさ。それでも足りないからって、今手の空いてる女たちが総出で仕立ててるんだ。伯爵さまが至る所で古着を買い集めているから商品は入ってこなくなったけど、在庫は捌けたし、仕立ての仕事がもらえたから、逆に儲かってるくらいだよ」
困っているわけじゃないと知り、シュエラは安堵して顔をほころばせる。するとマリアンも、安心したように目を細めて笑った。
「無事帰ってきてくれてほっとしたよ。お帰り、シュエラ」
挨拶もしないまま旅立つという不義理をしたにもかかわらず、こうして温かく迎えてくれる。シュエラは嬉しさに声を詰まらせた。
「ただいま、マリアンさん……」
往来で立ち話をしていたせいか、通りかかる人たちがシュエラに気付いて集まってくる。
「シュエラじゃないか！」
「お帰り、シュエラちゃん！」
「ただいま！」
この声を聞きつけた人たちが、あっちの店、こっちの家から出てくる。シュエラたちの周りにはあっという間に人垣ができた。
集まった人たちとの挨拶が落ち着いた頃、話を切り上げるべくナンシーが声を上げた。
「みなさん、すみませんけど、シュエラお嬢様とわたしは買い物があるんですよ！」
「何を買いにきたんだ？」

「卵とバターと生クリームです」
「そりゃあ早く買いにいかねぇとな」
人垣の内の一人の言葉に、他の人たちもうんうんとうなずく。パンやチーズといった日持ちのする食べ物ならともかく、すぐにダメになってしまう卵やバターは、朝のうちに売り切れてしまうことが多いのだ。
「何作るんだ？」
「ケーキですよ。スポンジケーキ」
「それじゃあ卵がたくさんいるね。ウチの鶏（にわとり）が産んでないか、見てきてやるよ」
そう言って、数人が人垣から離れていく。
「バターと生クリームは？」
人々が見やる先に、乳臭いエプロンをつけた男がいた。近くの農家から届いた牛乳でバターやチーズを作っている職人だ。
「あ、売り切れちゃった」
「〝売り切れちゃった〟じゃねーよ。何とかしやがれ」
職人に詰め寄る人たちに、シュエラは慌てて声をかける。
「いいのよ。卵も手に入るかわからないし、明日の分をお願いすることにして今日は帰るわ」
遠くから声がする。
「卵あったよー」

タイミングの良さにシュエラは苦笑してしまう。職人は冷や汗をかいて言った。
「あっ、そういえば早朝に届いた牛乳からそろそろ生クリームがとれるかもしれない。見てくるよ」
逃げるようにすたこら去っていく。
悪いことをしてしまった。無理を言ったのはこっちなのに。
持ち寄られた卵は全部で十五個あった。
「十個あれば十分なんですけど、どうしましょう？」
「ウチから持ってきた五つは、シュエラちゃんが無事に帰ったお祝いにタダであげるよ」
「ウチのもタダでいいよ。卵たっぷりのおいしいケーキを焼いてちょうだい」
他の人たちも、我も我もとタダにすると申し出てくれる。今回はその厚意をありがたく受けることにし、礼を言いながら買い物かごの中にそっと入れた。
そうしているうちに、さっき走っていった職人が戻ってくる。
「あと少しすれば生クリームができそうだ。バターも作るとなると昼前くらいまでかかりそうだけど、いいかい？」
ナンシーがもう一つの買い物かごの中から、お財布と蓋つきの入れ物を二つ出しながら答える。
「じゃあお願いしましょうかね。こっちにバター、こっちに生クリームを入れてちょうだい」
「毎度！」
受け取った入れ物と数枚の銅貨を持って、職人はまた走っていった。
「昼前くらいというと、まだずいぶん時間がありますから、一度帰りますか？」

ナンシーがシュエラにそう言うと、集まった人たちの中から声がかかる。
「時間あるんだったら話していかないか？　積もる話もあるしさ」
「えっと……」
期待のまなざしを送ってくるみんなとナンシーを交互に見やる。みんなと話はしたいけど、昼食の支度もあるし……
迷うシュエラにナンシーはにっこり笑い、入れ物を取り出して空になった買い物かごを渡した。
「シュエラお嬢様は、バターと生クリームを受け取ってから帰ってきてくださいな。わたしは先に帰って、昼食を作ってますよ」
「シュエラのことは任せとけ。ちゃんと邸まで送り届けるよ」
「お願いしますね」
ナンシーは卵の入ったほうのかごを持って帰っていった。
「じゃあ酒場に移動しようか」
シュエラは、人垣に囲まれたまま歩き出す。
「あの……みんな、仕事はいいの？」
「へーきさ。ちょっとくらいサボったって、どうってことないよ」
サボると奥さんや親方に叱られやしないかと心配するシュエラをよそに、集まった人々は彼女の背を押すようにして酒場へと向かった。

街の中央辺りにある酒場は、席がたくさんあることもあって街の集会場として使われることが多い。食事も出す店なのでこの時間は仕込みの真っ最中なのだろう、肉を焼くいいにおいが店の外にまで漂ってきている。
「おやじ！　邪魔するよ」
十数人ほどの人たちと一緒に開け放たれた扉をくぐると、奥の厨房から恰幅の良い厳つい顔をした男性が顔を出した。見た目は怖いが、「おやじ」と呼ばれて親しまれる、この酒場の店主だ。
「何もねぇ時に集まるなって、何度言やぁわかる!?」
「いいのか、おやじ？　そんなこと言って」
シュエラは腕を引っ張られ、店主の前に押し出された。
「お、お久しぶりです。おやじさん」
おずおずと頭を下げると、店主はシュエラを見て目を見開き、小走りで近付いてきた。
「シュ――シュエラじゃないか！」
店主の強面がシュエラの顔を覗き込み、泣き笑いになった。
「よく帰ってきたなぁ。おかえり、シュエラ」
「た、ただいま……」
感動の再会をにやにや見ていた人たちが、タイミングを見計らって店主に声をかける。
「ここ使っていいだろ？」
「ああ、いいとも」

シュエラは中央の席に座らされ、一緒に来た人たちはその周囲に椅子を持ってきて腰を下ろした。全員が着席するかしないかという時に、街の住人がもう一人飛び込んでくる。

粉で白く汚れたエプロンをつけた二十代半ばのその男は、シュエラのそばまで駆け寄ってきて、ひざまずいてぼろぼろと涙をこぼした。

「シュエラ、無事でよかった。無事でよかったよぉ……」

ここにきて、シュエラはようやく何かおかしいことに気付いた。自分が帰ってきたことを喜んでくれるのは嬉しいが、さすがに大げさだ。マリアンも、酒場の店主も、目の前でおいおい泣く粉屋の若旦那も。他の人たちもみな、何故か涙ぐんでいるような気がする。

シュエラがこの街を離れていたのは、城に滞在していた七カ月と、王都への行き来の間の三週間、そしてクリフォード公爵家に滞在していた一週間を合わせて八カ月程度のこと。そんなに長く留守にしていたわけではないし、無事を喜ばれるほど危険な目に遭ったわけでは――いや、二度ほど遭ったか。けれどそのことは家族にも話していないのだから、街のみんなが知っているはずはない。

何故そんなに喜ぶのかと尋ねるのもためらわれてぐるぐる考えていると、シュエラの隣に座ったマリアンが、困ったように笑いながらためらいがちに言った。

「シュエラがいなくなったとたん、伯爵さまが所領のあちこちにお金をかけるようになったもんだから、シュエラが売られちゃったんじゃないかってみんな心配してたんだよ」

「は？」

思いがけないことを言われて、つい間抜けな声を出してしまった。すると反対側の席に座った雑

貨屋のおかみも、困ったような笑みを浮かべて説明した。

「伯爵さまは王都にいる知人に預けたって言ってたけど、預けるって言ってもいろんな預け方があるじゃないか。そりゃあ伯爵さまは、所領のためとはいえ娘を売るような方じゃないってわかっちゃいるけどさ。ほら、シュエラちゃんがいなくなる数日前に、謎の貴族が街に来てたじゃない？だからその貴族が伯爵さまに無理難題を突きつけて、シュエラちゃんを強引に連れてっちゃったんじゃないかって」

〝謎の貴族〟とはケヴィンのことだろう。国王の側近という多忙の身でありながら、シュエラを愛妾（あいしょう）に推薦したいと言うためだけに、王都から遠く離れたこの地を訪れた。

それにしても〝売られちゃった〟とか〝連れてっちゃった〟って……

苦笑しそうになりながらもシュエラは反省する。

シュエラが旅立ったあと、所領の手入れが進むようになったのを見たら、そう考えても仕方ない。

シュエラは望んで王都に行き、その見返りとしてケヴィンは実家に援助してくれていた。けれど、〝王都で愛妾をやってました〟とはさすがにシュエラも言いにくい。だから家族も、街の人たちにはあいまいな説明しかできなかったのだろう。

肩をすくめて、シュエラは謝った。

「心配かけてごめんなさい。あの方は、わたしに仕事を紹介してくださったの。人づてにわたしのことを聞いて、いいお仕事があるからやってみないかって。所領にお金をかけられるようになったのは、勤め先の方が援助してくださるようになったからなの」

仕事イコール役目と思えば、あながち嘘とは言えない。後ろめたいけれど、邸に帰ったら家族と口裏を合わせなきゃとシュエラは心の中でつぶやく。
と、目の前の席を陣取った酒場の店主が、テーブルの上にずいっと身を乗り出して、ドスのきいた声で尋ねてきた。
「その仕事ってのは、まさか妾なんかじゃねぇよな？」
シュエラはどきっとして、一瞬表情をこわばらせる。するどい。内緒で囲われている妾じゃなくて、世間一般に認められている国王の愛妾だけど。
シュエラの微妙な変化に気付いた店主は、目を細くして彼女の表情を窺った。
「……そうなのか？」
「ま、まさか！」
胸の前で小さく手を振って、慌てて否定する。するとマリアンが、ふと思い出したように言った。
「妾って言えばさ、先頃王様が愛妾をお持ちになったんだってね」
シュエラは再びどきっとする。今度は気付かれなかったらしく、この場にいる人たちが口々に話し始めた。
「あー、そうだったよな。噂じゃひっでぇ悪女だとか」
「その噂は古いって。本当はお妃様のためにやってもいない罪を被るような出来たお人で、悪女の噂はその方を妬んだ奴らのでっち上げだったって話だ」
「それより、何人もの女を拒んできた王様がとうとう愛妾をお持ちなすったって、そっちのほうが

気になるよ」
「あたしゃそれ聞いてがっかりだったね。拒まれてもお妃様ひとすじなとこが、スケベなウチのと違ってご立派だなぁって思ってたんだけどねぇ」
そう言った女性がちらっと視線を向けた先で、彼女の亭主が首をすくめて人の陰に隠れる。
ここは王都から遠く離れている上に、シュエラが愛妾になったのは街を離れて一カ月以上後のことだから、街の人たちはシュエラが噂の愛妾であることに気付いていないようだ。
一人の男性が、腕を組みうんうんと訳知り顔でうなずいた。
「王様もやっぱり男だったってことだよ。周囲の反対を押し切って娶った王妃様でも、指一本触れられないとなれば、愛妾に走りたくなる気持ちもわかるさ」
意味がわからない言葉が出てきて、シュエラは首をかしげる。
「指一本触れられないって、どういう意味？」
何気なく問うと、周囲の人たちはぴたっと会話を止め、動揺したように視線をシュエラに向けた。
聞いちゃマズいことだったのかな……？
と戸惑っていると、粉屋の若旦那は空気を読まず、陽気な口調で言った。
「そりゃあ、夫婦の夜の営み――」
言いかけたところで若旦那は周囲からぼかすか殴られて、人々の間に消える。
若旦那を床に沈めたうちの一人が、ぺこぺこと頭を下げた。
「お嬢様にお耳汚しすみません」

立ち読みサンプルはここまで

何故〝お耳汚し〟になるのかはわからなかったけれど、先ほどの〝夫婦の夜の営み〟という一言で、シュエラは今の話の意味を悟った。

夜ごとのシグルドとの触れ合い。それは世継ぎをもうけるために必要なことだと、シグルドに教えられた。〝夫婦の営み〟という言葉が、あのことを指すのなら……

「あ、あはっ」

シュエラは真っ赤になり、恥ずかしさのあまり笑ってごまかす。

「あー……ははは」

「あはははは―」

酒場に集まった人たちの間から、いくつものごまかし笑いが起こった。

「ところで」

場を仕切り直すように、マリアンが語調を強めて言う。

「王都へ仕事しに行ってたって言ったけど、どんな仕事だったんだい？」

「話し相手、かな。一緒にお茶を飲んだり……」

言えない部分を省いてごにょごにょと答えると、みんな目を丸くしたりしばたたかせたりする。

「そんなことだけでお給金がいただけるのかい？」

自分で言っておいて何だが、シュエラ自身もそれが仕事になるとは思えない。でも本当のことを言えば、きっとみんな心配するだろう。

「わたしがお相手をしていた方は、いつもお忙しくてお疲れだったの。とても重い責任を背負って

いらっしゃって、常に緊張を強いられる生活をなさっていたから、その緊張から少しでも解放して差し上げるために、お茶の時間をご一緒したり……してたの」

――これでは逆に、わたくしがなぐさめられているように感じるのですが……

――そんなことはない。なぐさめられる……

以前耳元で聞いたシグルドとの会話がよみがえって、シュエラは内心うろたえた。

あれは王城で家族と面会した夜のことだった。自分ばかり家族と楽しい思いをしてしまったからなぐさめようとしたのに、逆にシグルドに抱きしめられてしまった。今でも、何であんなことでなぐさめられたのかわからない。ただ、あの時シュエラは初めてシグルドに抱きしめられ、強い困惑と緊張、そして少なからずの心地よさを感じていた。

あれから、ずいぶん長い時が経ったような気がする。シュエラはシグルドからキスされる喜びを教えられ、触れられた時の胸の高なりと寄り添って眠る安らぎを知った。

同時に、好きな人の想いが自分に向けられないことの悲しみも。

シグルドは、きっと今でもエミリアを愛している。幼い頃から互いになぐさめ合い、周囲の反対を押し切ってまで結婚し、そしてそのしあわせを願って自ら手放したエミリアを。

――余はエミリアに拒まれた。

エミリアについて初めて尋ねた夜、シグルドは笑みを浮かべながらもどこか痛みをこらえるような表情でそう言った。拒まれた時の辛さを思い出したのだろう。その辛さは、あの時でさえまだシグルドを苛(さいな)んでいた。